



昭和43年(1968年)

7月号(No. 277)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

特別寄稿

日本登山界の皆さんへ……吉良秀通… 1

紀行 千軒岳……………一原有徳… 2

随筆 常さん小伝(VII)……………初見一雄… 3

海外関係

ザリン氏よりのメッセージ…………… 2

日印合同隊より(2)…………… 2

海外登山隊…1968(IV)…………… 4

図書紹介…………… 5

東部ヒマラヤ植物写真集

日本山岳会学生部年報 No. 3

民族学研究 Vol.32, No.4(特集・山)

図書室だより…………… 5

図書及び地図の寄贈者芳名

小林基子, 故中村清太郎, 中馬敏

隆, 植木知司, 伊藤久行,

徳永篤司, 薬師義美, 松田雄一,

堀川英司郎, 藤島源太郎, 日地出

版(株)

会務報告…………… 7

氷雪技術講習会……………松永敏郎… 8

ルーム基金入金報告…………… 8

計報…………… 8

国立フランス・スキー学校の手続き… 9

海外登山審議会議事録から…………… 9

図書委員会報告……………10

金山平木暮祭のこと……………山梨支部…10

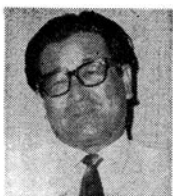
会員異動……………10

新入会員……………11

日本登山界の皆さんへ

ネパール駐劄
特命全權大使

吉良秀通



私は初代のネパール専任大使として本年二月

二十六日、カトマンズに赴任いたしました。

日本出発前には、日本山岳会名誉会員の横有

恒氏をはじめ、登山界の方々とも親しくお目に

かかり、日本の登山家の皆さんが熱心にネパー

ル・ヒマラヤを目指し、登山禁止の解除を待ち

望んでいるということも承知いたしております。

このたび、アジア太平洋大使会議のために五月二十五日に帰国いた

しました。この機会に是非、日本登山界の皆さんにお願いしたいと思

います。

正直なところ、これまで私自身は余り登山というものに縁がありま

せんでした。ネパールに着任し、はじめてヒマラヤの偉大な景観に接

し、登山家の皆さんのヒマラヤに登りたいという気持ちを本当に理解

することができたような気がします。

そこで、ネパール政府の要人の方々と話す機会があることに、「日本

の登山家たちは、ヒマラヤに登ることを熱望している。一刻も早く解

禁のニュースを知らせて欲しい」と云い続けているわけでありませ

ん。決して皆さんのことを忘れてはおりません。現在、大使館

は私を含めて四人の日本人と、一人のネパール人(或いは皆さんも御

承知かと思いますが、日本に留学していたバロア氏)で構成されてお

ります。

日本から、登山解禁について個人的な問い合せが殺到いたしており

ますが、私たち館員も極力御返事を差上げたいと思います。……が、何

分にも忙しさにまぎれて御返事を書けないことも多いかと思ひます。

また、ネパール政府から正式な通達のない限り、お答えいたしかね

る場合もあるという事情も御推察願いたいと思ひます。

なにはともあれ、ネパール政府より正式な通達があれば、速やかに

日本外務省を通じてお知らせ申し上げますので、今しばらく、お待ち

願いたいと存じます。

なお、私たち大使館員は、日本国民の皆さんが、ネパールを旅行さ

れる場合、安全に、楽しく旅を続けられるようお世話するのが義務で

もあります。

どうぞカトマンズ御訪問の折には、お立ち寄り下さい。大使館は、ア

ンナプルナ・ホテルにあります。

(外務省にて、六月七日談。文責編集委員会)

急 壁 家!!

俳 句

水田健之輔

急壁家などという言葉はわれわれに

は余り馴染めないうが、横になつてい

るとおかしくないが不思議である。つ

まりドイツ語の Steilesteier を直訳し

たわけだが、英語には Steepnocker

なんていう言葉はないと思う。(IY)

山荘の春ふかみゆく滝の音

梨咲いて一村淡き月夜かな

葉桜や故山の闇を懐かしむ

遠蛙たえだえびく飼屋かな

本年度より支部連絡委員会が新設さ

れました。委員は会務報告に記載の通

りですが、今後、各支部に所属の会員

各位は、支部連絡委員会を通して御連

絡下さい。支部長からの通達はもちろん

、支部所属の会員各位のどんな苦

情、連絡も、本委員会には速やかに善処

いたします。本委員会にて処理できな

い問題は必ず常務理事会、または理

事会に提出いたします。

「山」編集委員会より

各委員会の担当者は、開催された委

員会の報告を発表する予定号の前月の

十日までに原稿を提出して下さい。

再々で恐縮ですが、締切日を過ぎて

原稿を持ち込まれると、割付けが大幅

に変わりますので、印刷屋へ原稿を渡す

のが遅くなります。印刷屋の段取りも

あることです。一日の遅れが、発

行を10日も遅くすることになります。

せん。よろしくお願ひします。

お知らせ

第二四四回 小集会

ところ 日本山岳会々議室

とき 七月十七日(水) 18時30分

今回はチエニコスロバキヤ大使館より

拝借のフィルムにより、日本ではあま

り知られていない、アルプスの東にあ

るチエニコスロバキヤの高タトラ山脈、

低タトラ山脈、ベスキード山脈などに

ついての紹介を目的とした映画会を開

催いたしたいと思います。ふるって御

参加下さい。

▽支部連絡委員会より

本年度より支部連絡委員会が新設さ

れました。委員は会務報告に記載の通

りですが、今後、各支部に所属の会員

各位は、支部連絡委員会を通して御連

絡下さい。支部長からの通達はもちろん

、支部所属の会員各位のどんな苦

情、連絡も、本委員会には速やかに善処

いたします。本委員会にて処理できな

い問題は必ず常務理事会、または理

事会に提出いたします。



千軒岳

一原有徳

北海道南端の千軒岳は古生層に属し、壮年期の地形で、小さいながら峻しさを備えている。東に深い知内川は、砂金を産出する。

松前藩五代藩主慶長の慶長九年、金山奉行において大々的に砂金を採集した。その砂金小屋が千軒あったことから「千軒岳」と云われたという。

私がこの山にはじめて登ったのは昭和二十五年の七月である。

当時、住川の奥で二股に大きな屋根だけの残った金鉱掘り場の跡と、そこから磐坂駅まで索道があった。ここから知内川を溯行した。日高山脈のように深い溪谷は、いくつもの廊下や淵を作っていた。

台風通過の折で、広川原をすぎるところから雨となり、見通しがなく地図を頼りの行動となった。たかが一〇〇〇m位の山だからと、しゃにむに登ることにした。

現在の馬道とりつきの左股の奥だと思ふが、雪のような大きな石灰岩のある滝にゆきあたって引き返した。そして、灯明岳の鞍部への川をつめた。滝を越え、ゴルジュをぬけ、扇状の急な源頭から稜線に出た。

知内川側は崖となり、西側は緩傾斜で、一mもあるキンボーゲや、ギボシの花、いたどりが茂っていた。踏みあととを辿り、二つの突起を越え

一キロも行く踏みあとをふさぐように熊の糞が湯気をあけて、ど胆をぬかせた。まだ十一時ころだったので、勇をふるって進んだ。

雨がひどくなり、正后すぎ、地図の上ではもう頂上も近いと思われる距離なのに傾斜はゆるく、岳樺も大きくてそれらしくない。もどりの増水のことを気に引き返した。

ゴルジュや滝では水を頭からかぶり、廊下の淀みは胸までの深さだった。袴腰の支流では足をさらわれそうだった。三十分遅れたら渡れなかったろう。流れのゆるいところは、泳いで下った。四時すぎ、デグの鉱山跡に辿り着いた。

翌朝、目をさますと川水はもとのように静かに流れていた。

昭和二十九年一月(一日)三日、小樽山岳会の人と地元の岡田さんの五人で再び千軒岳へ出掛けた。

特長ゴム靴を用意した。夏と違い、やたらと時間をとり、奥二股の手前でキャンブした。翌日も今の夏道山コースあたりを高巻して難渋した。現在殉難碑のあるあたりで引きかえした。人数が多いこと、計画のまずさもあったが、三日間では無理だった。

三度目は、当時北海道大学函館分校に在学中の小林君と行くことにした。同年一月三十日。吹雪の中を前回と同じように知内川の岸をラッセルしながら進んだ。

それでも、前のときより雪が川をふさいでいるので通りやすく、広川原の少し手前でキャンブした。

二月一日。三十一日の停滞で元氣を取り戻し、夏道尾根の右股をつめた。思いのほか広い沢で、一時間程で中千軒との広い鞍部に出た。ここにデボして大千軒に行った。

そこで初めて夏来たときに登れなかった理由がわかった。新三色地図では修正されているが、旧地図は灯明岳からの尾根が頂上に続いていた。

夏に来たところは稜線に出るすぐ下方のようだった。灯明岳分岐点から、ドーム状に大千軒岳が高まっている。三十分程で、えびの尻尾をまとった三角点標の残骸が四本ある頂上についてた。(つづく)

メッセーヂ

日本女性とし、登山家として立派な隊員を派遣していただき感謝にたえません。

できる限りのお世話はいたしました。日印の国情・習慣の相違から御満足のいくことができなかったのはないかと懸念しております。

この経験を生かして、登山を通じての日印友好親善が一層深まるように祈ります。

三田幸夫日本山岳会々長宛
インド側代表のSaini氏より

日印合同隊 (2)

宮崎英子

5月5日。Panti ForestにBCを作り、更に Naimoni 沢ぞいの台地の上で、更に 500m 登ると私たちの目指している Kailas (8580m) と無名峰 (8417m) の分岐点になります。

明日は約 3600 m のその分岐点へ Advanced Base Camp を設け、同時に両方面を偵察することになっています。

Kailas は 2 度、無名峰も試みられましたが、あるようですが、まだ登られておりません。毎日お天気が悪く今日は雪になって、Kailas も無名峰も姿をかくしたままです。(5月6日付)

日印合同隊は5月13日、Kailas 峰に全員登頂しました。5月9日、Kailas 東側の 4190m 地点に CI を設営。翌10日、南へまわり込んでルートを探しましたが南面は急峻なため断念。12日に東側の氷河に登路を見つけた。CI II を設置しました。CI II は CI I より、わずかに 300m 上方にすぎません。これより上は適当なテント地がないため、高度差 1100m をラッッシュで登ることになりました。

5月13日。2名のザイルパーティーを組む。全員でライトも要らない程の月明りの中を午前3時20分、頂上へと出発。午前10時半に3組。正后に2組とそれぞれ頂上に立つことができました。頂上直下は両側が切れ落ちた約60度 300m の斜面で2時間かかっていました。Kailas の頂上は長さ数メートルの馬の背のような頂きです。

高山病・雪盲などで苦労しましたが6人のシェルバの活躍と、下山の途中雪になったものの風もない晴天に恵まれて午後、無事 CI II に戻りました。いま全員ベニスキャンで休養しています。(5月15日付)

とり返しにつかない事故を起してしまい申し訳ありません。

5月30日、Bharanur の村へ引き上げました。思えば丁度一ヶ月前の4月30日、16人はこの村に着いたのです。でもいま一人のシェルバは帰ってきません。BC から Kauti の村へ帰る途中の川でソナの遺体は茶色にふしました。早く落着いてこの Expedition を反省したい思いで一ぱいです。

オーダン氷河上の CI は東にサナクデンジョット (8580m) を、西に無名峰 (8580m) を見上げるところでした。標高 4600m です。サナクデンジョットは西からも北からも南からも難

かしく、私たちは無名峰に登ることにし、5月24日の午前5時30分に8人のメンバーと6人のシェルバが CI を出発しました。午前9時、頂上への最後の斜面に達し、トラバースを始めたときでした。先頭のソナだけが動いていました。雪崩があっという間に先頭ロープの4人をさらってしまいました。2番目のロープは約20m 流されて止まりました。この中に折井さんが居ました。4番のロープだったシェルバのドルジ、三島、私の3人は見えなくなった4人を求めて大急ぎで汗だくになって下りました。40分後にやっと4人のそばに達しましたが、ソナは既に息絶えていました。そのそばに坐り込んで打ちひしがれた2人のインド隊員、私は倒れているもうひとりのシェルバ、ニマをかかえて必死の思いで彼の名を呼びながら顔をたたきました。彼はただ、うなるような声を発しただけです。

事の重大さに私は自分を制御できない思いでした。泣いては救いようのないことを分っていたが、泣きまわらなかつても涙は自然にあふれてきました。

ひとりの人が死んだのに、Bharanur へ登るというインド隊員、ニエー・デリーへの帰りを急ぐ日本側。合同隊は一つのチームです。昨日、隊長のバテルさんと話すと2時間余り。ニエー・デリーへ帰ることに決って今日 Bharanur へ来ました。

ぼかぼかとした陽光の下で雪崩の一瞬を思い夢であつてくれればと願ってみても、歴とした現実と立腹してしまっています。ソナが亡くなった翌日、ダージリンの奥さんか手紙が届きました。彼は35歳。3人の子供があるということです。

シェルバ・ソナの冥福を祈るばかりです。(5月30日付)



常さん小伝 VII

初見一雄

時あたかも満洲事変の初まった時期で世間一般が勇気凛々としなげと申訳けないような風向きになってきたのである。「千万人と雖も我ゆかん」とたった独り勇しすぎる談話を発表してしまつた外務大臣がいても別段辭職どころか拍手喝采のご時世だったから、下々の鼻息もこれに合せなければ足なみは揃うまい。その飛び切り凛々たるところを持つてももらいたくなるのである。

千万人とリキむ必要はない、上高地中を相手にしても数はしれたものだ。中尾勢を敵に廻しても、当時は十三軒しかなかったから、多少の苦戦はあろうとも兵糧補給のみはつづけられたはずなのである。

高山（飛騨）の郷土みやげの一つに一位一刀彫りという木彫品があるのを御承知であろう。昨今の観光隆昌にのって、その専門店には人形があつたり、山小屋を象どった雛形のようなものが陳列されている。

関係のないことだからどうでもよいが、一刀彫りは高山が元祖ではあるまい、それに旧くから一位という人身を極めた肩書はなかつたように思うし、いちいの木はアララギだし北海道のイオノコであろう。語呂がいいから拝借したのであるが、以前は簡単にいち

い細工とよびそれとも市の近郊の国府村あたりの出来が多かつたようである。著に作れば上等なものになるし、笏になつて御成の前置きをとめる。携わる職人の芸術的な発想が優れてくれば、能面にもなるし、仏像にも刻まれよう。

これを円空伝来とか、その流れを汲むときかされても本気にははいけな。その近在からかなりの数の円空仏が発見された事実はあるし、巡錫の地だともいわれているが、鉈はつりの観音像と一刀彫りは無関係である。

おとなりの美濃の生れであるこの修験僧は、当時は発掘されておらず歴史の中に眠っていた。しかし、飛騨のたくみの伝統を否定しようとは思われないし、一位細工の進歩発展はのぞむところなのである。

その時期に女流彫刻家が出現したとしても、それがお土産木彫品の需要が今日ほどではない、ブーム以前であればにせよ不思議な現象ではないのである。

しかも旅の人間で、遊びにあらず、たつきのもとに彫刻を修行する女性、ゆくさきさきさきの宿屋か、村落で手近な素材をもとにして像を刻む、稚拙な、何とも説明のつけようもない強い、いば芸術的な、というよりほかにない置物を造りあげる。

御利益を願つてこれを購う村人達、それを引き取らなければ宿賃の差し引きのできないその主人、女ながら鑒一本の渡世があつたという話。

中尾でできた話はそこから始まるのである。

この木彫りの達者な芸術家であつたというのが第一の説、いやその細工物を背負つた行商人であつたという反論ありで、せまい範囲ながら異説をたてる人もでてくる。

どちらの説も高山生れの美人であつ

たことは一致していたから「築地」の出身ではなくなつたし、「明石町」は真似だけで終つてしまつたのは返えすがえすも惜まれる。

その女性の名は、誰も知らなかつたのは当然であつたが、本稿の執筆前にとつては大変不便なことになるのであ

るともあれこれ身を固めると口かず少い常さんも不意に身内にもらした一なれ初めのことにについては、ほぐれる緒口がでてきたのである。

旅の芸術女性に流浪して腕を磨く途が開けていたものとすると、旅絵師という一管の筆の放浪は昔からあつたようである。それも修行の道であらうから、厳しいものがあつた、と想像されるのは一宿の恩誼あれば、一幅をもつて報ゆという管笠わらちの時代であつたからである。

水雲というのか、南画と称するのが一畧の発色さえて、よく大雅、竹田の域を摩するものがあつたかどうかは別として、この種の絵師と泊りあわせたことが二回ばかりある。

その初回は赤石山麓の小良の湯であつた。戦後のあと口は藝科の横谷温泉であつた。

和服に袴というしらえて、赤石の方は髪を長くのばした大観好みの風采で、藝科山は頬ひげ豊かな鐵道様の威厳であつたが、瀟灑なり、むくつけしの差こそあれ、いづれも魂胆なくしてできあがつた扮装はあるまい。

双方共、署名落款の上の一字に仙をつけていたのは、風体にあわしからぬ可笑味があつてよかつたが、これは偶然の一致か、それとも仙号を授けられた一流一派があつて、ことさらに辺鄙な温泉宿を巡回する、移動個展の売り逃げ会とでもいうのであらうか。

その内容の仕組み、仕かけの詳しいことはしらないが、御両所とも滞在費

を差引いたほかに、たつぷり釣銭を上乗せした形跡がうかがえたから、なるほど悪くはない商売だと感心したし、こちらにも一芸あれば、やおら矢立てをとりだして、真似がしたくなつたぐらゐなのである。

これが女流の場合にはいかなることにあいなるのか。飛騨の仏師だ、たくみの子孫だのと、おひろめの口上は女なればこそ滑らかであるに相違ないが、さて需要の方の床の間、仏間の数はしれたものとすれば、釣銭の上乗せはむりであらう。

そこで無然たる眼つきになると足もとをみ透されるおそれがあるから、艶然たる流し目に切りかえて、たおやめの玲瓏然たる風情を披露すれば、上客現われたりと、またもや裏目にて、次の間つきの最上等に通されでもしたら、眼もあてられぬことになる余計な心配もされてくるのである。

中尾の論議で、この女史が芸術家であつたのか、商人にすぎなかつたのかはハッキリした結論はだしようもなかつたし、第一その作品をみたわけではないから、田舎のお神輿の飾りものの程度の職人芸なのか、神韻纏綿たるものを胚胎する、思わず息をとめるような手腕なのかはわからないのである。

それに、あるいは商人であつたとしても、盛りをすぎて、客足のと絶えがちな秋の上高地にねらいをつけたりとすると、その感覚は尋常ではないし商魂たくましいとはいえないのである。

まして「明石町」の雰囲気であれほどに醸しだす、シヨウの才能の持ちあわせがあつたとはとうい考えられな

い。だが大いに謙遜してもらつて、細工職人としておこ。

そしてこれらの絵師達——インチキでない方——と時こそちがえ、同じ行

の道を踏もうと志したのは天晴れであるが、一畧一管の風流を身につけていなかつたのは残念である。

女だてに、丸刀と鑿では物騒さがさきにたつて、身を護る役にはたとうが、風雅なみちと解される時代はまだきていなかったと思われ。

鑿を独鈷にもちかえて巡礼に化けても文句のするむきはあるまいが、年増となつて可愛さあまつて憎さが増すのは自然なりゆきであらうから、いくら独り身の憂き旅とはいいいながら、ひとのなさをかうまでにはいたらない。

白骨温泉の自家齋藤で顔をあわせたのがその女性であつた、中尾衆の一人の記憶がよみがえつてきて、足どりの一歩はわかつてきた。

しばしの滞在とはいへ、白骨には、本家、新宅の両齋藤と柳屋——あと一軒、そばや兼業のあつたかも知れない——の計三軒だけだった時代だから湯治客全部の部屋を廻つてもそれはしれたもの、注文殺到して作品まに合わず、おあとの方は、と胸元で手を揉み合せて断るほど繁盛したとは思えない。

（未完）

“White Horizon”

B. Frstrup & “The Greenland Ice Cap” (英訳) は美晴しい本だが、Mrs. Myrtle Simpson の“白い地平線”は面白い本である。女でGLの水帽を横断（一九六五年）したのは彼女が初めて。大体北極圏に沿っている。

会費の納入について

会費未納の方はいらっしやいませんか？

東京・神奈川・千葉・埼玉にお住いの方は二千元。

その他にお住いの方は千六百円。海外在住の会員は、\$600.00です。

1968-IV

海外登山隊

☆☆

サラグラール南峰より
東北方面を望む
一橋大学隊撮影
(1967)

☆☆☆☆



◇ 23 日本モンゴル合同学術登山隊
東京外国語大学山岳会
活動区域 モンゴル・アルタイ山脈
周辺
登山目標 ヘルヒラー山(4116m)他
隊員 小沢重男(隊長42)、窪田清
(35)、川村光郎(31)、佐藤正樹
(33)、厚沢恒夫(32)、辻通男
(33)、三宅修(36)、田中勝(26)

◇ 26 青山学院大学アラスカ登山隊
活動区域 Chugach Range
登山目標 Markus Baker(4016m)
隊員 徳久球雄(隊長36)、小倉雅
之(24)、土田紘介(23)、坂井義隆
(23)、若杉延夫(22)、青柳一雄
(21)、星野和久(21)、菅昭(20)

総経費 一〇〇万円(報告書制作
費一〇〇万円を含む)

総経費 二四一万円(但し現地滞在費は先方も)
◇ 24 バンジャブ・ヒマラヤ登山隊
登歩溪流会
活動区域 スン・クン南方地域、後、カン・ジエロワ方面踏査
登山目標 マツェル峰(6575m)
隊員 小原ケイ(40)、山田長政(25)、吉野勲(24)
総経費 一一〇万円

◇ 25 久留米大学ネパール医学調査診療隊
Kurume University Medical Mission to Nepal, 1968.
活動区域 西ネパールのBairadi, Jhar, Silgar-hidai 地方(アヒ・ナンバ山群の南方)
登山目標 時間に余裕があれば登る例えは Bankia Lek (6840m)。
隊員 脇坂順一(隊長、55)、木船修嗣(副隊長、36)、賀来俊輔(26)、吉村恭幸(34)、横山寿雄(33)、原哲弥(34)、熊谷和俊(30)、宮島可愛(29)、加藤秀木(48)
総経費 一〇七万円

◇ 27 千葉岳連アラスカ登山隊(調査隊)
活動区域 アラスカ山脈
登山目標 ヘイズ(4125m)
隊員 石原直哉(隊長、29)他二名、但し本隊は一九六九年
総経費 不明
(朝日新聞・京葉版・43.5.16による、計画書請求中)
◇ 28 神戸大学カナダ・ユーコン遠征隊
Kobe University Yukon Expedition
活動地域 ユーコン西部
登山目標 Mt. Steele (5070m), Mt. Lucania (5226m)
隊員 中西哲(隊長、39)、坂本亨(27)、増田正勝(29)、中国卓爾(24)、坂西俊一(21)、中村正男(21)、井上達男(20)
総経費 二〇四万円

◇ 29 恋嶺会ユーコン偵察隊
(本隊は一九七〇年の予定)
活動地域 ローガン山群
登山目標 King Peak (5221m)
隊員 中台久雄(21)、相田昭(21)
総経費 一〇七万円
◇ 30 吉小牧カナディアン・ローキーズ登山隊(主催・支笏山岳会)
活動地域 カナダ・ロッキー
登山目標 Mt. Robson (3953m)
隊員 能登正知(隊長、45)、高田修(20)、菅原国昭(23)。
総経費 一二二万円
◇ 31 南米大陸農業調査研究・パタゴニア・アンデス登山隊(主催・長野県山岳協会)
活動地域 チリ、アルゼンチンに跨る大陸水(Hiero Continental)登山目標 Balcos (2438m), Cofe (2926m), Paine group-Grande (3050m), Querno (2450m)
隊員 横地康生他一〇名位(出発年末につき未定)
総経費 四二二万円
◇ 32 日本岳友会パタゴニア遠征隊
"Patagonia Expedition of Niipon Gakuy Club"
活動地域 南部パタゴニア、大陸水並びにバイネ山群の踏査。
登山目標 FitzRoy (3440m), Cerro Torre (3128m), Cerro Moreno (3500m), Pio XII (3380m)
隊員 横田正利(隊長25)、青木敏(25)、松宮信弘(25)、北川雅昭(22)、北条勝彦(21)
総経費 二〇〇万円
◇ 33 立教大学HK遠征隊
活動地域 Trich Mir 周辺
今後三年の継続事業(学術研究)の調査隊
登山目標 未定
隊員 西川益生(36)、山野井武夫(34)
総経費 一二二万円
◇ 34 法政大学探検部第一次中央アジア探検隊
活動地域 カラコルム西部及びギルギット南西の山々
登山目標 Kamper Dior (7143m), Koz Sar (6679m) その他(注・予定であって、許可が出るかどうかは不明)
隊員 平靖夫(隊長、22)、佐藤芳男(21)、笠井芳郎(20)、久松啓次郎(19)
総経費 二四〇万円
(ギルギットに越冬の予定もあるらしい)
◇ 35 山口大学登山隊
活動地域 東部HKとHR
登山目標 アケル・キオー(七〇一七m)他
隊員 松屋信之、森山博他三名
(注・計画書未着につき詳細不明)
◇ 36 名古屋大学アフリカ大地溝帯学術調査隊(NUAFVE)
活動地域 東部アフリカの火山活動及び大地溝帯その他の調査、但しこれは二回目の遠征であって、後にも継続して行なわれる予定。
登山目標 事情が許せばキリマンジャロ、ケニアその他
隊員 松沢勲(団長62)、志井田功(54)、諏訪兼位(39)、大宮川邦彦(38)、水谷伸治郎(36)、矢入憲二(26)、青木治三(36)
総経費 一三五〇万円
この他にまだ大規模又は特殊なものとして、B隊、H隊、O隊があるが、まだ発表の段階となっていないし、発表して迷惑がかかっては困るので、ここでは御紹介しないことにする。
尚、以上の他にも海外登山隊はあると思うので、差支えなかったら、計画書を私あてにお送り願いたいと思う。
(訂正)前号(二六七号)所載の②、学習院大学HK登山隊の項は、その後変更がありましたので左記のように訂正します。
活動地域 HKの Garmush 氷河源頭、山々その他、帰途に Shah Jinali 峠越え。
隊員 藤井、大滝の二君不参、その代りに千木良滋夫(19)参加。
総経費 一六七万円。



図書紹介

東大インド植物調査隊編

東部ヒマラヤ植物写真集

山下 一夫

東京大学のヒマラヤ植物調査隊は、一九六〇年の春、第一回の調査をシガラ山脈とシッキム地方で行い、既に同調査隊の編著として、「シッキムヒマラヤの植物」(Spring Flora of Sikkim Himalaya) という豪華本が発行されているが、同隊はその後、一九六三年の秋に第二回の調査を東部ネパール、続いて一九六七年の春には、第三回の調査を世界でも珍らしいブータンで行った。今度上梓された「東部ヒマラヤの植物写真集」は、この三回の調査時に撮影された数千枚の写真の中から特に植物に関するものを選んで編集されたもので、いわば前回発行の「シッキムヒマラヤの植物」に、さらに東部ネパール、ブータン地方の植物を加えた広範なものだといえる。この中には初めて学界に紹介される植物や、ヒマラヤ地方独特の美しい植物がたくさん含まれていて、まことに興味深い。

東部ヒマラヤは、とくに日本の植物区系と深い関係をもつ地域で、現在日本に生えている植物の祖先、親戚、兄弟といった深い関係にあるものが少なくない。同隊の調査目的も、その関係を究明することに主眼があったようだが、その意味では、写真の説明にも、学名のほかに、一々「何々の一種」と

類似した仲間の日本名を挙げる配慮が施されていて、初めて見る植物でも深い親しみが感じられる。

特にわれわれにとって興味深いのは、日本の低山帯から亜高山帯に生えるツバメオモト、ズタヤクシユ、ミゾホオズキ、ヤマハハコ、ワチガイソウなど、殆んど日本のものと同じか或いは全くそれに近い植物が多いことだが、更にこれに本には、日本のカツラに似たテトラケントロン (Tetracentron) という植物を東部ネパールに続いてブータンでも初めて発見して、歓声を挙げたことが書かれている。

この植物はかつて千葉県の銚子付近で化石として発見されたことがあって、新世代の第三紀頃までは、日本にも生えていた証拠がある。今まで中国の中南部だけしか現存しないと考えられていたこの植物が、ヒマラヤとも共通して広く分布していたことがわかって、改めて日本の植物の起源や進化の過程を知る上に大きな功績を挙げたものと云うことができる。

この本には、美しいカラーを主とした植物写真三〇葉の他、山岳・民家など二〇数葉が収められているが、更に巻末には、「ブータンに植物を求めて」ほか三篇の紀行文が掲載されていて、敢えて植物の好事家に限らず、広くヒマラヤに心を引かれる者にとっては、等しく興味をそられる本であろうと考える。

井上書店発行/六〇〇〇円/

日本山岳会学生部年報

No. 3

一九六五
一九六六

「年々オヤ人同じからず」卒業してしまえば学生ではなくなる。そんな条件

の中で、関東の各大学の記録をまとめるのは仲々大変な仕事であったにちがいない。

内容を批判することは容易だが、とにかく面倒な仕事をやりとげたという努力を第一に買いたいと思う。

内容は、海外の記録を主としているが、最近の学生の海外への進出はめざましい。各大学山岳部の記録も簡単にまとめられている。一読することによって、学生登山界の動向を知ることができよう。学生の動向を知らずして彼らを批判することはできない。先輩たちには読まれ、批判されることにより(助言といった方が適切かもしれない)一層、学生たちも張り切ることができよう。売り上げが香ばしいときといっている。若い登山者を育てるという意味でも広く購入していただきたいこと、提灯をもっておく。(ZEN)

A5版/一八頁/写真四頁/日本山岳会学生部発行/非売品/ (ルームにあります。会員には四五〇円でお頒けする由)

民族学研究 32巻4号

特集 「山」

これは日本民族学会の機関紙である。今回は「山」を特集しているのので特に紹介しておく。

序論を含めて10の研究論文が掲載されている。その中には本会会員の犬飼哲夫氏、川喜田二郎氏の名前も見える。これらの論文はそれぞれの分野での専門家が書かれているので内容の批評をする余地はない。しかし我々登山者の立場から云えば、比較的古くから知っていたことを、専門家はむしろ最近まで知らなかったらしいと思える箇所もある。そんな箇所を発見して、いわれなき優越感にひたるのもよいが、さすがに専門家だけのことはあり、我々が見過していったものを適格に観察して、「なるほど」と思わせるものが多い。アマチュアはアマチュアなりに勉強し、山へ出掛けるとき、バスの車窓などから見かける村落に住む人の生活を知っていれば、山歩きも楽しみがふえるにちがいない。

そんな知識をふやきたい人におすすめする次第。(ZEN)

B5版/本文一〇九頁/日本民族学会発行/頒価七五〇円/



(4月受人)
小林基子氏寄贈

(1)『岳人』No. 38, 41, 44, 46~48, 62, 113, 162.

(注)『岳人』の欠号はあとNo.39~40, 42~43のみとなりました。

Journals Arrived in April 1968

1. Die Alpen : Jahrgang 44, 3, März 1968
2. " : " 1, Quartal 1968
3. Alpinismus : Jahrgang 6, No. 2, Februar 1968
4. Der Bergsteiger : Jahrgang 35, Heft 2, Februar 1968
5. Mitteilungen des Österreichischen Alpenvereins : Jahrgang 23, Heft 1/2, Jänner/Februar 1968
6. Austrian Alpine Club Newsletter. No. 17, New Year 1968
7. Mitteilungen des Deutschen Alpenvereins : Jahrgang 19, 3~4, Mai~Juli 1968
8. The Newsletter : Vol. 22, No. 1, Jan.-Feb. 1968
9. Rivista Mensile : Vol. 88, N. 12, Dicembre 1967 ~Vol. 89, No. 1, Gennaio 1968
10. Sierra Club Bulletin : Vol. 53, No. 1, January 1968

広告

リュックサック XI
まだ若干残部があります。
御希望の方は事務局へお申込み下さい。
早稲田大学山岳部

故中村清太郎氏の蔵書寄贈
この度、故中村清太郎氏の左記の蔵書を、安川茂雄氏のお力添えで御遺族から御寄贈戴きました。御報告申し上げます。

○「高山深谷」1~6輯、8~9輯。
○「山岳」第1年1号~第3年3号、
4の2~5の2、6の1~2、7の2~3、8の3~10の3、11の3~12の1、13の3~14の1、14の3~16の1、16の3~18の1、18の3~19の2、22の2、23の2~24の1、24の3~25の3、26の2~27の3、30の2、32の2、33の2~35の1、36の2、45~49、52~55、57~60。

海外遠征報告資料の寄贈

本会では、海外遠征の報告書はできる限り集めることにし、本会になじい報告書の寄贈方をお願いしたところ、この度左記の通り寄贈がありました。なおこれら資料の保管方法について検討したところ、地域別にまとめて合本することにしましたのでこの点を併せてお知らせ致します。今後とも皆様の御協力をお願い申し上げます。

中馬隆隆氏寄贈

(1) 沼田真編『東ネパール—生態調査とスンプールの登頂—』昭40・3
千葉大学ヒマラヤ委員会刊

植木知司氏寄贈

(1) 神奈川県アフリカ登山隊著『赤道の氷河を越えて』昭42・11 神奈川新聞社刊

伊藤久行氏寄贈

(1) 東海地区山岳連盟ヒマラヤ委員会編刊『ジエガルヒール登山隊報告書一九六〇年三月〜七月』昭39・2 徳永篤司氏寄贈

Aisushi Tokunaga: Experiences of Medical Survey in Central Nepal: Reprinted from the Journal of the Indian Medical Association, Vol. 29, No. 6, September 16, 1957)

(1) 薬師義美氏研究論文の寄贈
(1) 薬師義美著『ネパールの人々と地域構造について』(大谷中・高等学校『研究紀要』No. 1, 1963 抜刷)
(2) 薬師義美著『中部ネパール踏査における2・3の観察』(『研究紀要』No. 4, 1966 抜刷)

(3) 薬師義美編『1965〜66 中部ネパール踏査報告』昭41・11 山岳会中部ネパール踏査隊刊
(4) 全富山ヒマラヤ委員会『ヒマラヤ資料編 第一集』昭39・9

(5) 諏訪多栄蔵・薬師義美編『Content-

ts and Index to the Himalayan Journal Vol. 1 (1929) to Vol. XXI (1968), Kyoto, 1960
(6) 薬師義美編『Selected Index of Report on Himalaya, Tibet, and Central Asia to the Geographical Journal, Vol. 1 (1983) - Vol. 125 (1959), Kyoto, 1960
地図の寄贈

松田雄一氏寄贈

(1) Indian Meteorological Department: Weather Map 1:10,000,000
(2) Sketch Map of Mukut Himal and Environs 1:20,000
(3) Republic of India & Pakistan 1:80 Mile
(4) Survey of India Railway Map 1:67 Mile

堀川英司氏寄贈

(1) The Arctic Ocean (The British Trans-Arctic Expedition 1968-1969) 1:10,000,000
藤島源太郎氏寄贈

(1) 藤島玄編『飯豊連峰』1:50,000 昭35・9
(2) 山形県・新潟県『朝日連峰』1:50,000 昭34・7
(3) 藤島玄編『飯豊連峰大地図』1:50,000 昭37・3
(4) 藤島玄編『越後三山集成図』1:50,000 昭38・7
(5) 藤島玄編『朝日連峰案内地図』1:50,000 昭39・6
(6) 藤島玄編『苗場・谷川・岩菅集成図』1:50,000 昭40
(7) 藤島玄編『越後三山集成図』1:50,000 昭42
(8) 藤島玄編『飯豊連峰大地図』1:50,000 昭42

日出版株式会社寄贈

この度会員目黒四郎氏の御尽力により、日出版から左記の地図69図の御

寄贈を戴きました。同社及び目黒氏の御厚意に心よりお礼申し上げます。なおこれらと同時に『新修世界地図』1冊も戴きました(寄贈図書受入報告を参照)。

登山・ハイキングシリーズ

① 奥武蔵・武甲山・雲取山 1:60,000 昭43年1月版
② 奥多摩・大菩薩嶺 1:75,000 昭42年9月版
③ 奥秩父 1:70,000 昭42・5月版
④ 陣馬高原・秋川溪谷・道志山塊 1:75,000 昭43年1月版
⑤ 丹沢山塊 1:60,000 昭42年6月版
⑥ 富士と五湖・三ツ峠 1:70,000 昭42年9月版
⑦ 箱根・湯河原・熱海 1:35,000 昭42年5月版
⑧ 奥日光・奥鬼怒 1:60,000 昭42年8月版
⑨ 尾瀬と松枝岐会津駒 1:75,000 昭43年1月版
⑩ 軽井沢・神津牧場・妙義 1:75,000 昭42年5月版
⑪ 伊豆半島・大島 1:85,000 昭43年3月版
⑫ 三浦半島・江ノ島鎌倉 1:35,000 昭42年7月版
⑬ 美ヶ原・霧ヶ峰高原 1:75,000 昭43年1月版
⑭ 谷川岳と上越温泉郷 1:65,000 昭42年9月版
⑮ 八ヶ岳・蓼科高原 1:75,000 昭43年1月版
⑯ 那須・塩原・鬼怒川 1:75,000 昭43年3月版
⑰ 磐梯・吾妻山 1:75,000 昭43年1月版
⑱ 志賀高原・草津白根 1:75,000 昭43年2月版
⑲ 上高地・槍・乗鞍 1:75,000 昭42年9月版

②① 黒部・白馬・立山 1:75,000 昭42年6月版
②② 房総半島 1:100,000 昭42年5月版
②③ 浅間高原・鹿沢・菅平 1:75,000 昭43年2月版
②④ 蔵王連峰・松島 1:75,000 昭42年10月版
②⑤ 八幡平・岩手山・秋田駒 1:75,000 昭42年6月版
②⑥ 霧ヶ峰・白樺湖・蓼科高原 1:40,000 昭42年10月版
②⑦ 雲ノ平・黒部源流・槍・穂高 1:75,000 昭42年6月版
②⑧ 妙高・戸隠・野尻湖・黒姫飯縄 1:60,000 昭42年6月版
②⑨ 南アルプス北部・夜叉神峠・入笠山 1:75,000 昭42年6月版
②⑩ 中央アルプス・木曾御岳恵那山 1:60,000 昭42年2月版
②⑪ 南アルプス南部・井川湖寸又峽 1:75,000 昭43年1月版
②⑫ 北アルプスの全貌 1:150,000 昭43年1月版
②⑬ 白山・白川郷・医王山 1:65,000 昭42年7月版
②⑭ 飯豊・朝日連峰 1:70,000 昭42年7月版
②⑮ 大雪山・層雲峡・然別湖 1:80,000 昭42年7月版
②⑯ 六甲・摩耶 1:30,000 昭42年5月版
②⑰ 岩湯山・紀泉高原・友ヶ島 1:75,000 昭43年3月版
②⑱ 京都北山・比良 1:75,000 昭42年6月版
②⑲ 吉野・高野 1:40,000 昭42年6月版
②⑳ 大峰の山と溪谷 1:75,000 昭42年2月版(2部)
③① 大台ヶ原・大杉谷・台高山脈 1:75,000 昭43年1月版
③② 南紀・熊野・伊勢・志摩 1:30,000 昭42年4月版
③③ 奥高野竜神温泉・湯ノ峰温泉 1:75,000 昭41年6月版
③④ 赤目・青山・室生寺・室生火山 1:40,000 昭42年9月版
③⑤ 鈴鹿連峰・御在所岳・伊吹山 1:65,000 昭42年4月版
③⑥ 大山・蒜山 1:75,000 昭43年1月版
③⑦ 帝釈峽・三瓶山・比婆・道後・船通山 1:75,000 昭42年5月版
③⑧ 秋吉台・三段峽・芸北山群 1:75,000 昭43年3月版
③⑨ 九重・飯田・久住高原・万年山 1:60,000 昭42年7月版
③⑩ 英彦山・耶馬溪 1:75,000 昭43年1月版
③⑪ 阿蘇周遊と登山 1:60,000 昭42年5月版
③⑫ 平尾至・福智山塊 1:60,000 昭43年1月版
③⑬ 由布・鶴見岳・別府温泉 1:45,000 昭42年6月版
③⑭ ドライガイドシリーズ
① 『東京西郊と奥多摩・甲州路』1:95,000 昭42年7月版
② 『南房総と水郷』1:130,000 昭43年1月版
③ 『湘南・三浦半島』1:65,000 昭42年7月版
④ 『箱根・熱海・富士スピードウェイ』1:60,000 昭42年7月版
⑤ 『富士五湖とスバルライン』1:120,000 昭42年7月版
⑥ 『長瀬・秩父・正丸峠』1:90,000 昭42年7月版
⑦ 『日光・金精道路・鬼怒川』1:90,000 昭42年7月版
⑧ 『赤城・榛名』1:80,000 昭42年7月版
⑨ 『軽井沢・志賀高原・草津』1:90,000 昭42年7月版

(以下次号)



定例理事・評議員会

○日時 5月16日 18時50分

○場所 本会々議室

○出席 三田会長、吉沢、深田副会長

理事 藤井、山崎、大塚、丹部、飯

野、川森、竹田、宮下、長尾、芳

野、中島、浜野、小倉、野上、小方

評議員 松方、島田、佐藤、渡辺、

中屋、加藤、石原、沼倉。

議題

（一）ルーム移転の件

藤井理事
本会の家主である向井組の本社が、

当ビルに移転するに際し本会が現在使

用している五階が入用となり、六階へ

移転してほしいという申し入れがあ

った。それに伴って向井組と関係ある

目黒ターミナル株式会社が、目下建設

予定中である渋谷の青葉台マンション

の買取りの件も併せて提案があった。

向井ビルの六階に移る条件は、現状

のまま、そっくり六階に移し、その費

用の一切は向井組が負担する。期日は

向井組本社移転の本年末の予定。

青葉台マンションは、（目黒区上目

黒八五九）で、三階の特別区副D

（二八・三坪）八百万円。その他この

階にはA、（二八・一坪、千三百万円）

B（一四・二坪、五九五万円）、C（一

八・二坪、七九〇万円）のブロックが

ある。CはDに隣接している。

交通は渋谷から東急玉川線土通下

車五分。

本件に関する討議の概要は次の通

り。

青葉台マンション買取りについて、

その大きな魅力は、二八・三坪で八百

万円という格安の値段であり、現在の保証金を充たせ、家賃を分割払いに当てれば、二～三年後には会の所有になるという点である。これについては現在のルームが三八・八坪であるが、これより尚十坪程狭くなるということが、ライブラリーの点などから一番問題であるという大方の意見であった。

また、クラブという性格からルームの機能を第一に考えるべきで、会員が利用する便利さを尊重することが大切で、移転したばかりの矢先に不便な場所に移るのは反対で、財政が苦しいに苦しいなりに切り抜ける方法を考えるべきであるという意見もあった。

經理担当理事から現在の財務状況の説明があり、現在の家賃が年間約百万円の支出で収支のバランスは年間約五〇～七〇万円の赤字である。本会の健全財政のためには、会費の完全徴収と経費の削減であるが、現在の支出では会費の値上げが急務と思われる。これも二～三年後として、その間は特別維持会費を一人五千円位の割合でお願いし赤字を埋めなければならぬ。この実情から、会が財産としてルームを持てれば家賃不要となるので、その分は節約できるわけである。

この件については先方から提案のあった二八・三坪では狭くて問題にならない。広く借りれば金利の問題もある。また交通の便、ロケーションなどについて更に詳細に調査し、目黒ターミナルビル関係者と常務理事が会って詳しい数字をまとめ、もう一度検討し直すということになり、加藤評議員、大塚、飯野常務理事が折衝することになった。

（二）神河内山荘改築の件

飯野理事
山荘が老朽化しているが、これを新・改築する段階にきているが、会の自己資金でこれを実施することはできな

い。また山岳研究所という名目で許可を得ている関係上、地元業者にかかせるわけにもいかない。大会社の健康保険組合を本会の賛助会員にして、その資金で新改築する。当然、会の名前で申請するのだが、その健康の利用者と相談の上、どのようなものを建てるかを決めていかなければならない。概ね以上のような方針が説明され了承されたが、常務理事会に更に具体案を煮つめるようにとの要望があった。

（三）常任評議員選出の件

次の各氏が選出された。

松方三郎、渡辺公平、島田興、中屋健次、加藤泰安、佐藤久一朗、石原憲治、沼倉寛二（以上八名）

（四）各種専門委員会について

一、ルーム委員会

新ルームの保全、管理、財産管理、リスト作成、装備保管、お宝の管理など。

委員 大塚博美、宮下秀樹、松田雄一、飯野亨、須田紀子、神崎忠男、岡部浩子

担当理事 竹田寛次、野上成男

二、学生部指導委員会

大学山岳部を対象とした学生部を指導する。

顧問 加藤泰安

委員長 藤井連平・委員 栗林一路、村木潤次郎、広谷光一郎、平野真市、牧野内昭武、錦織英夫、磯須須彦、堀山毅

担当理事 宮下秀樹、浜野吉生

三、指導・研究委員会

広義の登山技術の指導と研究を行なう。講習会、研究会、各支部からの講師派遣依頼に对此こでアレンドして入選する。また指導員制度医療問題もここで扱う。

委員長 辰田吉吉・委員 山崎安治、金坂一郎、大塚博美、村木潤次郎、川上隆・北博正・小味秀純・三方淳

男・松永敏郎・牧野内昭武・広谷精啓・錦織英夫・平野真市・土肥正毅・芳野赴夫・宮下秀樹・竹田寛次・長尾勉夫（医療担当）

担当理事 広谷光一郎

四、山日記編集委員会

十一月一日発刊予定

委員 水野弥彦・村瀬満男・鹿野勝彦・坂本矩祥

担当理事 大貫良夫

五、図書委員会

本会図書の整理・補充・管理・運営などを行なう。

委員 深田久弥・初見一雄・小林義正・石坂昭二・山崎安治・松田雄一・平山善吉・大橋晋・村石幸彦・倉知敏・武田満子・岩淵泰郎・細井隆司・雁部貞夫・福田房子・川上忠義

担当理事 野上成男

六、海外連絡委員会

地域別担当委員を設け世界各国の情報を蒐集しこれと連絡をとる。

顧問 日高信六郎・三田幸夫・深田久弥・吉沢一郎

委員 牧野文子・近藤等・鈴木郭之・芳野赴夫・堀川英司郎・関口周也・田村俊介・山口節子・小味秀純・松田雄一・倉知敏

担当理事 丹部雄雄

七、集金委員会

委員 山崎安治・金坂一郎・大塚博美・丹部雄雄・広谷光一郎・松本熊次郎・堀川英司郎・鈴木郭之・西丸震哉・今井嘉道・関口周也・小味秀純・山口節子・富田美智子・武田満子

担当理事 小倉重子・芳野赴夫

八、会報編集委員会
本会の歴史の一資料となるためあらゆる動向は大小を問わず一切をこれに掲載する。会員サービスの一つの大きな使命を持っているために、東京地区会員、各地方支部および会員の頁を設ける。第三種郵便を取ることに。

委員長 山崎安治・委員 吉沢一郎、松田雄一・坂本矩祥・倉知敏・担当理事 小方弘弘

九、山岳編集委員会

四十三年度中に刊行のこと。内容は海外登山偏重にならぬこと。

委員長 望月達夫・委員 山崎安治・松田雄一・竹田寛次・大塚博美・野上成男

担当理事 中島寛

一〇、婦人懇談会

婦人会員へのサービスのため集会・懇談会・講習会などを行なう。

相談役 村井米子・佐藤テル・広谷光一郎・川森左智子

委員 宮崎英子・山口節子・富田美智子・須田紀子・武田育子・斎藤かつら

担当理事 小倉重子

十一、遭難対策委員会

山岳遭難に対する会の意見を代表する発表機関。スポークスマンとしての仕事が多なるもの。

委員 辰田吉吉・藤田佳宏・大塚博美・芳野赴夫・土肥正毅・川上隆

担当理事 藤井連平

十二、自然保護委員会

委員 日高信六郎・松方三郎・深田久弥・加藤泰安・村井米子・織内信彦・辰田吉吉・富田美智子・渡辺公平・島田興

担当理事 川森左智子

十三、新刊編集委員会

今迄の会の蓄積をもとにして山岳に関する新刊を発行し併せて会の財政を助ける。

委員 松方三郎・大貫良夫・浜野吉生・深田久弥・渡辺公平・望月達夫

担当理事 山崎安治

十四、支部連絡委員会

各支部会員へのサービス、各支部と

の連絡等を主とした内容の行事を行なう。

委員長—深田久弥 委員—折井健一

・小方金弘・坂下心一・吉田広明・

・山田毅

担当理事—宮下秀樹

十五、神河内山荘運営委員会

改築の案を進める。

委員長—松方三郎 委員—日高信六

・島田巽・望月達夫・折井健一・

・高山忠四郎・塚本茂樹

担当理事—藤井進平・飯野亨

(五) 報告事項

① U I A 総会……………丹部理事

本年は英国が当番国で十月四日～六

日、ロンドンで開かれる。昨年加盟し

た本会に参加要請とそのスケジュール

が届いた。これについては、参加の返

事を出すことにし、吉沢一郎副会長に

一名の公式代表として参加してもらう

ことにした。

(四) 故中村清太郎氏遺作展中間報告

……大塚理事

○売上額 九一三、七〇〇円

油 絵 八四九、七〇〇円

その他 六四、〇〇〇円

○経費 五三、〇七五円

(印刷・装飾・運搬・日当)

○剰余金 八六〇、六二五円

(会場費は不明につき未精算)

なお、五月二十四日～二十九日、西

武デパートにて遺作展を行なうので、

これが終了した後、最終精算報告が行

なわれる。

(三) 新旧役員交歓会 ……飯野理事

来る六月六日(木)に行なう。(上

野・蓬菜閣)

(二) 第十一回六義園有志閑談会

……川森理事

六月十五日(土)四時三〇分より園

内の心泉亭にて行なう。

(例)第二十二回ウェストン祭

して徳本峠越え上高地入り。

(三) 山岳バックナンパー寄贈の件

……野上理事

文部省登山研修所から依頼のあった

山岳バックナンパーは審議の結果、在

庫の46年、47年、51年、57年、59年

61年の計六冊を寄贈することにした。

水雪技術講習会講師派遣

青森県山岳連盟(会長・西田安逸氏)

より依頼のあった水雪技術講習会(南

八甲田・猿倉岳方面)に本会より、松

永敏郎、牧野内昭武の二名を5月2

日5日まで講師として派遣した。

……講習会に参加して……

松永敏郎

陸奥の山々は、春浅い感がありまし

た。車が市街を抜けて山裾の、まだ、

おおおとした緑の丘陵を登りきると、

にわかひろびろと展開する高原台

地、雲谷に着きます。つづが咲き、

落葉松の新芽が漸く萌え出ようとし

ていました。

やがてブナの下に雪があらわれ

て、切れ間もなく続き、酸欠湯を過ぎ

て硫黄岳の南斜面を走る頃は、バスの

屋根根さスッポリかくれるくらいに雪

が道の両側に壁を作っていました。

猿倉温泉から全員設置予定地へ出発

しました。

夏は熊笹が生い繁り、路以外はとて

も歩けないそうですが、今はブナとア

オモリトドマツの原生林に深い雪が積

み、根元のうらは、ニメートルほど

あったでしょうか。緩やかな林の斜面

を歩いて設置地に着きました。

この日は、開講式に続いて雪崩の

話。なだれに遭遇した人は皆無。デブ

リも殆んど知らないという受講生を前

に説明に苦勞した次第です。

高校生が約百人も参加しています。

二日目。朝からよく晴れて、キツク

ステツプや、滑走停止、グリセードな

ど個人の技術を練習しました。朝の

うちのスキー訓練は雪に馴れた人た

ちだけあって、実にあざやかなもので

した。社会人の殆んどは、山靴にそのま

ま使えるバックンや紐具を工夫してお

り、都会から来たスキーヤーとは、甚

だ対照的でありました。

三日目は朝から雨。それでも折角の

機会というので、ズブズブの雪の上で

雨に濡れながら、ザイルを使用しての

登下降や確保の訓練にはげみました。

屋敷の頃から雨脚が強くなり定して

講義は中止になってしまいました。し

かし、現地の指導者クラスの人た

ち十五名ばかりと狭い天幕の中であ

い話し合いができたのは、意義があ

ったと思います。

研修に集った人々は実に熱心でし

た。中央(?)の人たちの持つ技術、

海外の山々への最近の動向、それら

を知ろうとする意欲に満ちあふれて

ました。一方、私共は八甲田のおや

かな峰々の自然そのもののたずまい

に魅せられてしまい、会が終りその

かえり、地元の方々にその美しい山

々を守ってくださるよう再三お願い

した次第でありました。

ルーム基金入金報告

事務局

5月1日～5月31日の間の、ルーム基

金募金の応募者は左記の通りです。

申込件数 一五件

(追加二件を含む)

申込口数 二三五口

総申込件数 一、三四四件

総申込口数 七、四一九

三

三

氏名 会員番号 応募口数 現住地

阿部 淳 六四〇八 一北海道

阿岸 充穂 五九三六 一北海道

泉 亮 六三三三 一北海道

岩間 弘雄 五六四四 一山梨

小倉 正高 六三一八 二千葉

大島 輝夫 四〇一二 二兵庫

斎藤 晋 六一八〇 三東京

徳長 正 五〇五三 追一

追二

追三

追四

追五

追六

追七

追八

追九

追十

追十一

追十二

追十三

追十四

追十五

追十六

追十七

追十八

追十九

追二十

追二十一

追二十二

追二十三

追二十四

追二十五

追二十六

追二十七

追二十八

追二十九

追三十

追三十一

追三十二

追三十三

あったのが青木小学校で、私の通っ

ていた学校である。私よりたしか一年

下に佐伯さんの長男も通学しており、

佐伯さんは、いまでいえばPTAの

会長、当時は父兄会の会長としてよく

学校にも顔を出しておられた。こ

ちらは小学生、相手はれっきとした大

人なのでろくな話などしたことはな

かったのだがお顔だけは憶えていた。昭和

五六年のことでは、いまから考えれば

まあ若かったはずだが、かなり頭が白

く眼鏡をかけた温厚な紳士であった。

氏は大正四年九月辻村伊助、小島島

水の紹介で入会、会員番号四二八番、

山岳には十二年一号に「雪の南アルプ

ス観望台としての伊豆修善寺」を寄稿

されており、また十一年一号の会員登

山報には大正五年七月嘉門次を案内と

して明神三ノ池から明神岳に登り岳川

に下っている記録があるが、これの末

尾に佐伯とだけ記しているの恐らく

同氏と私は推測している。これは島水

氏の明治四十四年七月の登山に次ぐ記

録である。入会当時は横浜での山岳会

の会合にもいろいろ出席され、大正六

年十一月十七日横浜市馬車道ワカナで

開かれた第一回入会会員有志晩餐会を

始め、七年六月二十九日山下町ホテル

・ド・フランスでの第三回有志晩餐会

では自作の立山模型図を展示され、本

会に寄贈されたことが山岳十三年一

号に見えている。また大正八年五月二

五日には島水氏一時帰朝歓迎会を兼ね

た飯洲川崎屋における第二十一回有志

晩餐会に出席されている。

なお同氏の合同慰霊祭は五月二十八

日、社会福祉団体主催で反町的神奈川

県福祉会館で行なわれた。(山崎)

伊藤勝弥氏 元会員、昭和十二年十

一月入会、会員番号一七二六番、昭和

四十四年五月九日逝去。七十九才。

計蔵氏、斎藤長寿郎氏、和田豊種氏図書紹介、会務報告、英文梗概、写真地図多数、総頁三七三頁、定価二千元
▽一部落丁、乱丁がありましたことをお詫び致します。おとりかえしますので、ルームまでお申し出下さい。
(中島)

『図書委員会報告』(43・4)

四月九日

初見、山崎、野上、川上(村石委員の代理)

①『磯野計蔵記念文庫』について、上記の名称を正式名称としたい旨、野上委員より提案があり、また現在までの経過が同委員より報告された。

②同文庫の書架について

・塗装の色の色の選択。

・材質、板の厚さ等について再確認。

・ネーム・プレートの内容を検討。

・プレートは一時プラスチックの物を使用し、後に真鍮などの金属製の物とにかえる。

・書架は四月二十日の総会までに備えられるよう業者に再確認する。

③中村清太郎氏蔵書寄贈の報告。並びに故人の蔵書を磯野、中村氏の如く寄贈して載く方法について検討。

④図書交換会中止の件。
交換希望者が会員の細井隆司氏一人の為、中止することになった。

⑤来年度への提言。
・「この一本展」は本来の趣旨に添った型に返すべきである。
・まず蔵書数をふやし、そして図書室の管理態勢を充実させる。
・年来の希望でありながら果し得なかった部報会報類の蒐集を徹底させる。

以上

第六回 金山平

木暮理太郎翁碑前こん親会

山梨支部

恒例の、五月第三土曜日、日曜日の山梨県北巨摩郡須王町金山平、木暮翁碑前こん親会は、今年で回を重ねること六回となり、五月十八日、十九日、三十三名を集めてひらかれました。

高曇りの金山平、三年前に植えた白樺も大きくなって、若葉が匂うようでした。午後四時から碑前で、ささやかですが、碑前祭をとり行いました。

席上、神谷泰名譽委員は、「毎年、山梨の皆様にはお世話になるばかりですが、上高地のウエストン祭のようにこの集りをもっと盛になるようにしたいと思います。」と話され、永原輝雄委員は、「会員として三十年になりましたが、去年からはルームで書記の仕事をしていただいております。静岡支部の紅葉会に続いて支部主催の行事に二度目の参加です。このような機会を通して、支部本部間の意志の疎通をはかっていきたいと思います。」と話されました。

中河与一委員は、「現代は山から下降の時代である、内村鑑三先生は『英雄は山地から出ず』といわれたが、現代も英雄のいない時代である。この現代に対する抵抗として山登りを続けて行きたい。」とあいさつされ、今井雄二委員は、「新緑の金山には始めてだが、実にすばらしい。それに、昔のままの姿がたまたまれていることをこの上なく喜ぶ。何時までも観光地化されないようにつとめてほしい。」とそれぞれ記念感話を御披露していただきました。

ついで、この木暮碑を建設するについて、献身的な御奉仕をなされた。石楠花山岳会の故一柳兵象氏の御遺族、

しず江夫人、遺児の峰幸君が船橋より見えられ、故人のかたみの品々を碑のかたわらに埋め、小さなケルンを積み、咲きそめた石楠花の花をたむけました。その後、野口末延委員が、故一柳氏の思い出を語り、碑前祭を終りました。

日暮れとともに、斎藤後哉支部常務委員をチーフコックとして、山本良子、石垣政雄会員らの手をわずらわし、午前中より準備された。山菜料理が有井館のランプの下、座敷一杯にならべられました。

こごみ、わらび、山うど、沢わさびの酢の物、ふきのミリン漬け、しいたけ、たらの芽のてんぷら、いたどりのマヨネーズ和え、レバーのチャシュー、甲州名物の煮貝(あわびの醤油煮)それに毎回好評のシシ肉のさしみ、これらが、九州小鹿田、山陰の出西の中皿、沖縄壺屋の大鉢に盛り、記念品として分配された。日本各地の民衆のさかずきや徳利で酒をくみかわし、一同歓談のひとときを持ち、最後は、有井館心づくしの手打そばに舌つづみをうちました。その後、昨年同様、一水会の松本久男画伯のスケッチをかこんで記念の寄書きをしました。

明けて、十九日、朝から空模様はおかしかったのですが、金峯山、みずがき山へと二パーティにわかれて記念山行を行い、東京勢の一部は、有井館の車で、昨春秋完成した。木賊峠、解音峠の林道を清川を経て甲府まで雨中をかえりました。途中では、山うど、わらび、こごみなど山の幸でザックが大部ふくらみました。

至らない点が多々ございましたが、来年も、是非、新録の金山平において下さいませよう、支部員一同心からお待ち申し上げております。

(山村正光記)

× × ×

ルーム日誌(43・5)

7日(火) 会報委員会、学生部委員会
10日(金) 山日記編集委員会
14日(火) 常務理事会
16日(木) 定例理事評議員会
17日(金) 登山研修所運営委員会
20日(月) 学生部委員会
23日(木) 海外連絡委員会
28日(火) 図書委員会
29日(水) 集委員会、出版委員会
31日(金) 常務理事会
五月中来室者 三五四名

本会の郵便整理番号は

1 0 1 です。

編集後記

ルーム移転問題や、神河内山荘改築問題、それやこれやで担当者はいずれも大忙がし。どの問題をとりあげても、いずれも会員サービスということにしほられてくるのだから責任は重かつ大である。

山岳第六十一年も、ボリニーム、内容ともに堂々たるものが出来上り、すでにお手もとにおとどけたはずだが、それだけに定価もぐんとはね上った。地方会員の会費では一部四百円の赤字という計算になる。念のため調べてみたら明治三十九年の創刊当時は年額会費一円で、山岳は年三回出し、一部三十五銭。小生入会当時の昭和十五年で会費が十円、山岳は年二回発行で一冊が三円の定価がついている。諸物価値上がりの折から本会の会費もまた値上げを検討しなければならなくなると思うと頭が痛い。

物価高といえ、先日西武百貨店で開かれた古書展には山岳の全揃いが何と三十万円、会報の揃いがこれでも六万円という値がついていた。他の山の古書の値段はおして知るべしである。この山岳の揃いは、会員氏が入手しようとかけつけたところ、タッチの差で買手がついていたそう。会報の編集もまず軌道に乗ったようだ。(山崎)

昭和四十三年度

「山」編集委員の顔振れ

編集代表 山崎安治
委員 山崎安治、吉沢一、坂本矩一、松田雄、倉知全、小方弘
担当理事

昭和四十三年七月十日発行

東京都千代田区神田錦町
三二二 向井ビル

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 山崎安治

頒価五十円

(293) 七四四一
振替口座東京四八二九番印刷所 株式会社 技報堂
東京都港区赤坂一丁目三番六号山の店、山の店、山の店、山の店、山の店、山の店
登山用具専門店
プライスリスト進呈

山。店

大阪市北区曾根崎上1-24 TEL341-4192

山の店、山の店、山の店、山の店、山の店、山の店